

分散投資としての株式市場における 負の相関関係の存在と有効性 :DCCモデルによる実証分析

アルウォヘビ アブドラ

【要旨】

本稿では、現実の経済活動から負の相関関係を持つ投資先を考え、それらの組み合わせによって分散効果で保有資産のリスクを低下させることができるという仮説を立てる。負の相関関係を持つと考えられる投資先を選び、ピアソンの相関係数とDynamic Conditional Correlationモデルを用いて、実際の相関関係を調べる。サウジアラビア株式市場の病院と保険会社、米国株式市場の病院と保険会社、米国株式市場の航空会社と原油価格という3つのケースを調査したところ、現実の経済活動から考えられた通りの負の相関関係はなかった。また、仮説通りの負の相関関係がなかった理由に関して経済の景気循環や株式市場の複雑さを基に定性分析を行う。そして統計学の難しさや健康保険だけの保険会社がないことなどの相関関係の分析を妨げる課題を提示する。更に、本稿の事例を用いて投資パフォーマンスを計算する。その結果、相関係数を用いた資産選択が役立つことを示す。

【講評】

本論文は、限定されたセクター間或いは銘柄間の分散投資の有効性を実証する目的をもって展開されている。先行研究における本論文の位置づけは必ずしも明確とは言えないものの、研究領域の基礎知識を得る努力を重ねた上で、自らの関心に基づく独自性のある研究主題が設定されている点は高い評価に値する。また、自らが用いた分析方法の有効性だけでなく課題や限界も併記されている。仮説の設定や結論を導く論理展開 において、やや強引な印象を受ける部分がないわけではないが、仮説を支持する分析結果が得られなかったことについて考察を誠実に加えている点は、高く評価できる研究態度である。